

# 桑原浩二の国語科（第4学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

国語科は、言語能力を育成する教科である。次期学習指導要領には、「言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習」の充実が示されている。このような学習で、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」を育成する。「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」とは、「書くこと」の学習において、文章の構成を考える力に該当する。

第4学年国語科「書くこと」の学習における指導事項で大切にしたいことの一つに、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることがある。なぜなら、文章を書くためには、収集した書く材料から内容のまとまりをつくり、順序を考えて並べるといふ文章の構成の仕方を身に付けさせる必要があるからである。

本研究では、**文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成する子ども**を目指す。具体的には、文章化過程の往還を通して、伝えたいことと書く言葉との関係に着目するという「見方・考え方」を働かせ、文章の構成を考える力を発揮し、伝えたいことに応じて段落の配列を考え、「伝えたい自分の考えを伝えるために、『自分の考え』『考えの理由』『考えるきっかけになった出来事』の順番に短冊カードを並べて、文章の構成を考えました。『自分の考え』を始めにもってきた理由は、伝えたいことを強調して伝えると読み手に伝わりやすそうです」などと、強調等の意図をもって文章を構成する姿である。なお、文章化過程の往還とは、「課題設定や取材」「構成」「記述」「推敲」「交流」といふ文章化過程を行きつ戻りつすることである。本研究における文章化過程の往還とは、「課題設定や取材」「構成」「記述」過程の往還を主とする。

これまでの「書くこと」の指導においても教材文の構成に気付かせ、文章の構成をとらえて書く子どもの姿を目指してきた。しかし、教材文の構成に気付いても、実際には、「始め—中—終わり」の構成に当てはめるだけで終始してしまう子どもの姿が見られた。

その原因は、単元で扱う教材文の構成に気付かせるだけで留まり、なぜそのように段落が配列されているのかという構成の意図をとらえさせてこなかったことにある。つまり、段落の役割を理解させたり、段落同士を関係付けさせたりする際に、伝えたいことと書く言葉との関係に着目するという「見方・考え方」を十分に働かさせていなかったのである。

私は、子どもが「伝えたいことが相手に伝わるか」という視点を常にもち続けることが「書くこと」の授業づくりのポイントと考える。したがって、子どもが文章の構成及び文章全体を見返すことで、伝えたいことと書く言葉との関係に着目する「見方・考え方」を働かせ、文章化過程を往還しながら文章を練り上げていく学習に改善する。

## 2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>○段落の役割に関する知識・技能</li> <li>○考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など、情報と情報との関係に関する知識・技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○思いや考えを伝えようとする態度</li> </ul>

## 3 主張する働き掛け

まず、単元の導入として、「自分の考えを書いて伝えよう」という言語活動を提示する。すると、すぐに自分の考えをもてる子どももいれば悩む子どももいる。そこで、自分の考えをもたせやすくするために、1週間程度の取材期間を設定する。一人一人に取材メモの束を配付しておき、この取材期間に、考えたことをメモさせておく。子どもは、この取材メモを基に、伝えたい自分の考えを仮決定する。次に、文章の組み立てを考えさせる。子どもは、これまでの書くことにおける学習経験から、いきなり原稿用紙に記述するのではなく、事柄を並べるための思考ツールである構成表を活用して文章の構成を考えようとする。ただし、この段階において多数の子どもが考える文章の構成は、「始め—中—終わり」の枠組に当てはめただけであり、伝えたいことが明確に伝わる構成にはなっていない。つまり、伝えたいことに合わせて明確に伝えようとする意図が不明確なままの構成に終始しているのである。そして、子どもは、構成表を基に草稿段階の文章を記述する（C0）。

### 働き掛け1

**文章を交流させ、成果物の作成を提案する。**

これは、問いをもたせ、学習課題を設定させるための働き掛けである。出来上がった文章を班や全体で互いに交流させる。その結果、子どもは、ある程度の満足感を得る。その一方、自分の文章に自信がもてない子どももいる。ここで、成果物の作成を提案する。子どもは、このような提案を受けることで、ためらったり、抵抗感を示したりする。これは、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせた姿といえる。なぜなら、「伝えたいことが伝わる文章になっているか」という視点で自分の文章を見返しているからである。その後、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、思いや考えを伝えようとする態度（③態度）を発揮し、文章をよりよくしたい、書き直したいという思い

を抱く。そして、「相手に伝わる文章を書くためにはどうするか」などと、学習課題を設定する。

#### 働き掛け2

文章化過程のどこの過程をどのように考え直していくかを問う。

これは、学習課題を解決するために考える視点を明確にし、様々な資質・能力を発揮して学習する見通しをもたせるための働き掛けである。

学習課題を設定した子どもは、自分の文章を直したいと考えているものの、どのように直していけばよいかという内容と方法の見通しをもっていない。ここで、文章化過程のどこの過程をどのように考え直していくかを問う。子どもは、「書くことをもう少し整理して構成するとよい」などと、文章化過程のどこにどのような問題点があるのかに気が付き始める。つまり、文章化過程を「課題設定や取材」や「構成」の過程まで戻ってみることで、学習課題を解決できそうだと見通しをもつ。

その際、子どもは、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、再構成をするためには構成表が有効であると考え（⑤ツール活用能力）。

#### 働き掛け3

複数の短冊カードを提示し、どのように並べるかを問うた後、伝えたい自分の考えに合う試しの構成を提案させる。

これは、段落の配列に気付かせ、思考・判断・表現させるための働き掛けである。

段落の配列について目を向けさせるために、共通教材として複数枚の短冊カードを提示する。複数枚の短冊カードとは、「自分の考え」「考えの理由」「考えるきっかけになった出来事」等である。これらの短冊カードを提示し、「どのように短冊カードを並べるか」と問う。すると子どもは、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、短冊カードを様々動かし、試行錯誤しながら伝えたいことが読み手に伝わる文章の構成を考える（①知識・技能）。

さらに、「どうしてもそのように短冊カードを並べたのか」と理由を問う。すると子どもは、「自分の考え」を始めにもってきた理由として「強調」等を挙げ、「考えるきっかけになった出来事」を始めにもってきた理由として「惹き付け」等を挙げる。このように、複数の短冊カードの並べ方を検討させることを通し、段落の配列における「強調」「惹き付け」等の効果を全体で共有させる。

その後、「伝えたい自分の考えを伝えるためには、どのように短冊カードを並べるか」と試しの構成を提案させる。子どもは、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、伝えたい自分の考えに合うように短冊カードを並び替える（②思考力・判断力・表現力）。そして、どのように試しの構成を考えたのか、友達と互いに助言し合う（④協働性）。

#### 働き掛け4

文章の構成を最終決定させ、判断した理由を問う。

これは、課題解決することができるようにさせるための働き掛けである。

様々な文章の構成を互いに提案し合わせた後、最終的な文章の構成を決定させる。子どもは友達の助言を参考にしながら、最終的な文章の構成を決定する。その後、「なぜそのような文章の構成にしたのか」などと、判断した理由を問う。すると子どもは、文章化過程を往還したことを通し、「強調」「惹き付け」等の構成の意図を表出する。このようにして、**文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成する子ども**（Cn）となる。

#### 働き掛け5

学習を通して分かったこと・考えたこと・思ったことを問う。

これは、これまでの学習を振り返り、発揮した資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。

文章の構成を最終決定させた後に、「学習課題について分かったこと、考えたこと、思ったことは何か」と問う。すると子どもは、**伝えたいことと書く言葉との関係に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、様々な資質・能力を発揮したことで、文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成できたことを自覚する（①知識・技能②思考力・判断力・表現力③態度）。

## 4 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、文章化過程の往還を通して、意図をもって文章を構成することができたかどうかを、子どもの発言及びワークシートへの記述から検証する。
- ② 働き掛け1, 3を受けて、想定した「見方・考え方」が働かせていたかどうかを、子どもの発言、同意の挙手、つぶやき、ワークシートへの記述から検証する。
- ③ 働き掛け1～4を受けて、想定した資質・能力を発揮していたかどうかを、子どもの発言、ワークシートへの記述、短冊カード、構成表、実際の子どもの姿、撮影した映像から判断する。

## 5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 「2分の1成人の主張－わたしの生活を改善しよう－」(7時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「2分の1成人の主張－学級を改善しよう－」(7時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「2分の1成人の主張－学校を改善しよう－」(7時間)